

# 第46回ジュニアオリンピック陸上競技大会

## (10/23~25 横浜日産スタジアム)RESULTS

<Aクラス男子3000m予選>	島口 大輝	9:03:62
<Aクラス男子110mJH予選>	神原 大地	15:41 (+0.8) 2着
<同 準決勝>	神原 大地	16:01 (-2.2) 8着

- ♪♪夢輝け！東雲中学！しのめブルーの超特急♪♪ 大阪ベンチでジュニアオリンピックに出場した何人かの選手が、声を合わせて東雲中の応援コールを声を合わせて練習してくれている。音頭をとるのは、Aクラス110mJHに出場する神原と、東雲や大阪の応援に横浜に駆けつけてくれた山本と畑田の3人。まもなく、島口が出場するAクラス男子3000m予選が始まる。この種目に東雲の選手が出場するのは実は初めてとなる。8分53秒71のベスト記録を持つ島口の目標はまずは決勝進出。自己ベストを更新して8分46~48秒あたりの記録を出すイメージでこの日まで練習をしてきたのである。出場人数は54人。2組に分かれて、各組の5着までと6着以降の記録上位8名が大会最終日おこなわれる決勝に進出できる。島口はスプリント力も高く、スパートを得意とする選手である。先頭集団の後方に位置することができれば、決勝進出の可能性が高くなる。島口の調整段階では自己ベストの手応えがあった。しかし、全国の大舞台は初デビューとなる。朝から落ち着かない様子の島口を見て、プレッシャーと戦っているのがよくわかった。誰もが、必ず経験することである。
- 2組のレースが始まった。最初からハイペースであった。島口も400mを69秒、800mを2分22秒くらいで通過する。1組がスローペースの展開であったことが大きく影響しているのだ。みんな1組の5着のタイムを知り、プラスの人数も計算しながらしたたかに走っている。1000mの先頭の入りが2分55秒あたり。ハイペースの入りであったが、この1000mのラップは普通である。イーブンペースではない。すなわち、小刻みなペースのアップダウンがあり、ボディーブローのように体力を消耗しているのだ。たまたま、集団が縦長になった。島口も先頭集団からやや離れた第2集団後方となった。2000mの通過が5分50秒あたりか。島口の通過は6分02秒。島口は最後の1000mを2分50秒ほどで走るスピードランナーであるが、もう余力はほとんど残っていなかった。苦しそうに首を振りながら、あえぐようにフィニッシュ。9分03秒62。まったく全国の強豪選手の相手とならなかった。完敗である。この組の1着は8分36秒。8分38秒以内に着どりの5人がゴールするハイレベルな



レースであった。さすが、全国大会である。「先生、ハイペースで走っていても、後ろを振り返りながら先頭は走っているんですよ」と、レース後の島口。レース後に、決勝進出のプラス8名が正式発表された。8分47秒51までの18人。イメージどおりであった。島口の今の力で、条件がそろえばこの8分47秒51は出せない数字ではないと思う。しかし、全国のトップランナーはこの条件を揃えさせないのだ。まさに百戦錬磨の選手たちである。さらに付け加えれば、島口は平常心で走れなかったように思う。全国大会には魔物が棲んでいるのだ。ただ、今回のレースを経験したことは、島口にとって大きな経験となったはずだ。全国中学校駅伝で、また都道府県対抗駅伝の大舞台に進めば、必ずもう一度対戦する相手となるはず。今は自分の力のなさを噛みしめ、もう一度日々の練習に精進すれば、必ずや魔物を退治し、強豪選手と互角の勝負ができる選手に成長できるはず。それくらい大きな可能性を秘めた選手であるからである。

- 大会最終日。Aクラス男子110mJHの予選、準決勝、決勝がおこなわれる日である。実は神原は現地入りするまでは絶好調であった。夏の北海道全中を経験したことも大きい。ところが、計算外のことがひとつあった。それがハードルの器具であった。横浜のハードルは旧式タイプのものであったのだ。大阪では今やハードルは新式のタイプが当たり前で、規格は同じでも、やはり跳びやすさが全然違う。神原は身長が166cm。夏の全中より板1枚高くなっているジュニアハードルの高さ99.1cm。いつも練習では高さを低くしてフレキハードルで練習している神原にとっては、大きな問題となってしまった。



- 案の定、現地入りしてからのアプローチ練習では、重量感のあるハードルを意識しすぎて、リード足の局面で腰が引けたイメージとなってしまったのである。前日の調整練習では「(イメージが悪くなるから)無理してアプローチ練習の本数をこなす必要はないよ」と、アドバイス。本番前のアップでは、女子の高さのハードルでリード足で前に進む感覚を身につけさせてから、男子のJHの高さのハードルのアプローチ練習を必要最低限の本数に制限しておこなった。「きっと、予選のレースが終わったら、安心して準決勝のレースに進めるはず…」と、アドバイスして選手招集所へ送り出した。
- 12時00分、競技開始。Aクラス110mYH予選。全部で7組あって。各組3着までと、4着以降の記録上位3名が準決勝進出となる。この日東京では木枯らし一番が吹き込み気温も下がる。大きなスタンドに囲まれているスタジアムとは言え、朝から風向きがころころ変わるコンディション。4組6レーンの神原が登場。この種目のエントリー数は55名。神原の自己記録15秒03はランキング11位である。神原の公式アプローチ練習を見てひと安心した。リード足に重心が乗った彼らしいハードリングであったからだ。この時点で彼の準決勝進出を確信した。スターターのピストルで神原が好ス

タートを切る。1台目のアプローチも何ら問題がない。中盤からハードルを越えるたびにスピードが上がる好調時の動きであった。そのまま2着でフィニッシュ。15秒41のますますの記録で、難なく準決勝進出を決めたのである。



- いよいよ勝負の準決勝を迎える。ウォーミングアップ場では、予選とはまた違った雰囲気気で選手たちのアプローチ練習が繰り返される。動きが悪くない。不安があるとすれば、神原がこの高さの実戦の経験が少ないということ。次の準決勝が4レースめとなる。2レース目で、この大会の参加標準記録を突破してしまうのだから、彼のセンスの良さにもいつも驚かされる。14時20分、競技開始。Aクラス男子110mJH準決勝。1組4レーンに神原が登場。このレースは14秒台の記録をイメージしなければならないので、風向きが気になって仕方なかった。大型映像に映し出される彼の表情は落ち着いて見えた。「セット！」の声で、競技場が静寂に包まれる。ピストルの閃光がまぶしく光ると8人の走者がきれいにスタートを切った。神原のアプローチに注目していたが、スピードに乗れている。「さあ、これから…！」と、気合いが入った瞬間、3台目あたりでリード足をぶつけて、ハードルを倒してバランスを失う。そこからは、持ち前のセンスで何とか10台のハードルを飛び越えたのだが、リズムを崩して加速に乗ることはできなかった。16秒01。向かい風2.2m。同タイム着差ありの8着で準決勝敗退が決まった。レース後に「やらかしてしまいました…」と、うなだれる神原。全中の四種競技に続いて2大会連続の入賞を目指していただけに、この惨敗はショックだったことでしょう。それでも、この経験を生かして倍返しできるくらい大きく成長できる可能性を持った選手である。神原はひとまず、このレースで引退。3月の日本ジュニア室内陸上（大阪城ホール）出場も視野に入れながら、高校で必ずやさらに大きく進出し、もう一度全国の舞台で勝負できる選手になるはずと期待しているのだ。
- 第46回ジュニアオリンピック陸上競技大会。最終日の夕方6時頃、新横浜駅のホームに上るエスカレーターで「あっという間に（ジュニアオリンピックが）終わってしまった。もっと横浜に居たかったな」と、神原。島口も笑顔で応える。日産スタジアムの競技場の大きさや全国大会ならではの大会運営にきっと目を丸くしたことでしょう。言葉では言い表せないほどのたくさんの経験をした2泊3日の旅。いつも思うことであるが、旅の終わりは新たなる旅の始まりではないか。思いどおりの結果ではなかったが、神原と島口の少し大人びた表情を見て、かえがえのない素晴らしい体験をしたことをつくづく感じたのです。日本一のとっぺんを目指す道のりについて、より明確になったはずだ。日産スタジアムの補助競技場からスタジアムに向かうらせん階段のように、決してまっすぐではないけれど、それでも確実にとっぺんに向かって歩み続けてくれるに違いない。